

日本史Bにおける大河ドラマを取り入れた単元構成とその展開

丸山 仁

はじめに

前稿^{〔1〕}では、歴史嫌いの生徒が少なくない中で、日本史に対する興味・関心を高めていく一つの手段として大河ドラマを取り上げた実践を紹介した。

その中で日本史に対する興味・関心を高めるための手段として大河ドラマを取り上げる理由を三点述べた。さらに次の二点を加えたい。

一点目は、教科書に基づく日常学習から離れることになり、授業の単調化を避けることができるということである。毎回の授業で実物教材や模型、小話のようなものを準備し、生徒に授業内容に対する興味・関心を喚起することはもちろん実践すべきことである。例えば、江戸時代の化政文化の学習で、平賀源内が考案したエレキテルの復元模型を生徒に提示し、実際に静電気を起こしてみるところというところを行ったことがある。その時の反応は筆者が想像した以上に高校生でも面白がってくれた。導入といった位置づけからさらに一歩進めて授業一回分を用い、教科書から離

れて大河ドラマをテーマとした特別授業を行うことは、同様あるいはそれ以上に興味・関心を喚起する効果が得られるのではないだろうか。

二点目は、いわゆる概説的な内容ではなく、個別具体化した内容として展開することができるということである。二〇一〇年度の大河ドラマであった「龍馬伝」や二〇一一年度の大河ドラマである「江 姫たちの戦国」もそうであるように大河ドラマでは一人の主人公の人生を描くという形で物語が展開されていくことが多い。それに対して日本史Bの教科書を用いた日常学習の中で一人の人物に焦点を当てて授業を展開することは現実としてはなかなか難しい。教科書の箇所によっては一時間の授業の中で何人も人物が登場する時もあり、誰が何を行ったのかという機械的な知識は頭に入るとしても、一人の人物を通してその時代背景を探るといふ展開をつくることは難しいのではないだろうか。じっくり一人の人物に焦点をあてて考えるという作業は歴史の奥深さを考える上で有益であろう。それが大河ドラマを取り上げることで実践することができるのではないだろうか。

そこで本稿では、日常の授業の中にどのように大河ドラマの実践を取り入れたのかその全体像を提示したい。実践例としては二〇〇九年度の高校二年生日本史Bにおいて二〇〇八年度の大河ドラマであった「天地人」を取り上げた特別授業を紹介する。

まず私が勤務している宮城学院高等学校で行った日本史Bの全体像を提示する。その上で二〇〇九年度の大河ドラマ「天地人」の時代である戦国時代の単元構成を提示し、当日配布したレジュメや資料に基づきながら大河ドラマを素材とした授業実践を報告することとする。

一 日本史B二年間の学習展開

宮城学院高等学校では高校二年生と高校三年生の二年間をかけて、日本史Bの学習を行うカリキュラムを組んでいる。⁽²⁾ 単位数は各学年ともに四単位である。

二〇〇九年度・二〇一〇年度は、教科書として青木美智男・深谷克己ほか『日本史B』（三省堂）、資料集として『歴史資料館 日本史のライブラリー』（とうほう）を使用した。⁽³⁾ 学習進度は次のようなものであった。

高校二年生では、「第一章 列島の形成と原始社会」の学習からはじまり、「第十四章 近世から近代へ」までを学習した。高校三年生の学習は「第十五章 明治維新と近代国家」からはじまり、十一月までに最終章である「第二十章 経済大国への道」を学習した。⁽⁴⁾

年度当初にシラバスを発行し、生徒に学習目標をはじめとして大まかな学習計画を提示している。二〇〇九年度、高校二年生の日本史Bにおける学習目標は次の三点であった。

- 一、日本の前近代史・明治初期を、史資料に基づき学ぶことができる。
- 二、各時代の国際環境と関連づけて理解を深めることができる。
- 三、中央からの視点だけでなく、地域からの視点で、あるいは「勝者」からではなく、「敗者」の視点から捉えることができる。

第一点は歴史学という学問の根幹であり、史資料に基づいた歴史学研究成果が教科書記述の土台となっていることを生徒に認識させることを意図している。これには日本史Bの学習を通して、現在の情報社会の中で生きていく上

で、氾濫する情報を無批判に受け入れるのではなく、根拠は何かを考えて情報を判断し、取捨選択する力を養いたいという授業者の願いがある。第二点は古代の中国側の史書にみえる日本に関する記述やいわゆる遣隋使の国書をめぐる問題、明が上位、日本が下位という関係を受け入れることで成り立つ日明貿易の問題など、いわゆる華夷秩序という世界観が前近代における日本の国際的な位置を考える上で重要な枠組みとしてあることを指摘するものである。日本という一国の歴史の展開を学ぶわけであるが、日本という閉じた島国の歴史ではなく、世界の中の日本という視野を養うことを意図している。第三点は東北地方で学んでいるという地域性を意識し、蝦夷征討の問題や平泉藤原氏の問題などを奈良・京都中心史観ではなく、東北から日本の歴史を考えたいということ在意図している。物事を多角的に捉える力を養いたいという授業者の願いでもある。

また学習へのアドバイスとして次の五点を生徒に示している。

- 一、歴史の見方・考え方を養うために、ただ漠然と覚えるのではなく、「なぜ」とか「どうして」など、その背景にあるものを考えることを心がけよう。
- 二、事前に教科書を読み、次に学習する所はどこがポイントなのか、また自分自身どこがわからないのかを明確にし、その時間どこに力点をおいて授業に臨むのか、自分の授業に対する課題を明確にしておくこと。
- 三、板書以外にも、教員が口頭で説明したり、図示したことで重要だと思った事はしっかりノートに書き留めること。
- 四、受験に対応できるノート作りを普段から継続して行うこと。ノート見開き半分を板書、残りの半分をメモ欄にし、模擬試験で出題された問題、定期試験で間違えた問題、問題集で重要だと思った問題などを記録すること。

五、小テストで重要事項を確認し定着させるように努めること。

授業に臨むための準備や板書の取り方について具体的に指示をすることで生徒自身が主体的に取り組むことができるように考えた配慮である。

さて、筆者は、板書ではなくプリントを作成し、重要語句や重要人物を穴埋めしながら進めていく方法で授業を展開した。詳細はプリント例(資料一)を参照していただきたい。

板書ではなくプリントで進める一番の理由は、板書では大学入試に対応できる十分な内容を提示することが難しいと判断したことにある。しかし板書に比べてプリントは、内容が細かくなることによって大きな流れとして捉えにくいという弱点があると考えている。それを補うために各節ごとにその節を理解するために最も大切な事項や特色を「Q」「A」という方式で提示することを行った。プリント例(資料一)では「Q 戦国大名はどのように領国を経営したか」と「A 分国法 寄親寄子制 指出検地」にあたる。

また最重要事項を赤色、重要事項を黄色、人物を緑色というように複数の色を使うことで生徒の理解を助けるように工夫している。まずは赤色の最重要事項を中心に復習をすることを提示し、大きな流れを押さえた上で黄色の重要事項を押さえるように指導することで段階的に理解することができると考えている。さらにコラムを織り交ぜてより詳しく知りたい、または教科書に書かれていない歴史の奥深さを知りたいというような要望にも応えるようにしている。⁽⁵⁾プリント例(資料一)では「Q 家訓・家法・分国法の違いは」「Q 貫高制とは歴史的にどのような意味をもつか?」にあたる。基礎知識の定着をはかるために教科書約十頁ことを目安として小テスト(資料二)を実施している。

資料一

第10章 中世から近世へ

1 戦国の動乱

Q 戦国大名はどのように領国を経営したか

1) 戦国時代

資 141

応仁の乱 [1467～77] 後→戦乱100年

①幕府の支配権の弱体化：幕府の実質的な支配地域は畿内近国のみ

②守護大名の没落：守護代・国人の台頭 「下剋上」

細川氏→三好長慶→松永久秀

③鎌倉公方の分裂：(古河公方) [足利成氏]と

(堀越公方) [足利政知]

関東管領家の分裂：山内上杉と扇谷上杉

2) 国一揆と一向一揆

資 129-2

(1) (国一揆)：国人が、幕府や守護大名の支配から独立しようとする動き

(山城の国一揆) [1485～93]：南山城地方の国人たちが

畠山軍 (畠山政長・義就) を国外に追放。

合議で政治を行う。

(2) 一向一揆

(一向宗) [=浄土真宗]：惣村に道場。交通の要地に (寺内町)

ex 大和国今井・河内国富田林

信者 (=門徒) は、本願寺のもと、(講)
に編成。

広い範囲で (一向一揆) を結ぶ

ex 三河の一向一揆 [1563]・長島の一向一揆 [1571]

(加賀の一向一揆) [1488]：門徒の武士や農民が中心となり、

守護の (富樫政親) を攻め滅ぼす。

加賀国 = 「百姓の持ちたる国」

3) 自治都市と法華一揆

資 142

自治都市の形成

① (博多)：12人の (年行司)

② (堺)：36人の (会合衆)

③京都：町衆という自治組織。(月行事) による町政の運営

町衆は (法華一揆) を結ぶ

↓

(天文法華の乱) [1536]：日蓮宗の勢力増大を恐れた天台宗

延暦寺による法華一揆への攻撃

4) 戦国大名の登場

資 141

(戦国大名); 国人や地侍と主従関係を結び、強大な軍事力を組織。

(領国) (=分国): 支配領域

※ 戦国大名の活躍した時代 = 戦国時代

- 主な戦国大名: ①(北条早雲)…関東
 ②(今川義元)…駿河
 ③(武田信玄)…甲斐
 ④(島津貴久)…薩摩
 ⑤(上杉謙信)…越後
 ⑥(毛利元就)…安芸 大内義隆→陶晴賢→毛利元就
 ⑦(長宗我部元親)…四国
 ⑧(伊達政宗)…東北

※ 戦国大名の多くは守護代や国人出身(⑤⑥⑦⑧)

5) 家臣団の編制と貫高制

(1) (寄親寄子制); 地侍を大量に家臣に取り立て、かれらを(寄子)とし、有力家臣を(寄親)とする。

= 「擬制的」親子関係
 →集団戦が可能となる

(2) (貫高); 年貢高を(銭)であらわしたもの

[=その土地からとれる税金の額]

(貫高制) = 貫高にもとづいて大名と家臣との主従関係が結ばれる。

(3) (指出検地): 家臣・寺社・農民から年貢高を申告させる検地のこと

→戦国大名の直接支配を推進。荘園公領制の否定へ
 「富国強兵」←佐渡や甲州の金、大森の銀

6) 領国支配と分国法

資 141

(分国法) (=家法・壁書): 領国支配の基本法

ex 塵芥集 [伊達家]・朝倉孝景家々・今川仮名目録

特徴 (喧嘩両成敗法) →大名の裁判権確立

※ 喧嘩(けんか)で暴力を行使した者双方に対し、理由を問わず同等の刑に科すこと。

→「私戦」を禁止して大名の裁判を受けさせる。

大名 = 調停者

Q 家訓・家法・分国法の違いは

A 家法・分国法＝戦国大名が家臣団の統制、領国支配のために制定した基本法
 家訓＝一族を対象とする道徳的規範
 家法＝家臣団を対象とする法的規範
 分国法＝領国民一般の支配をめざす

Q 貫高制とは歴史的にどのような意味をもつのか？

A 貫高制＝戦国大名が、国人・地侍らの家臣の収入額を、銭に換算した貫高という基準で統一的にとらえ、それに見あった一定の軍役を負担させた制度。
 意義とは？＝年貢高と軍役の双方を結ぶ統一した制度の創出

7) 戦国時代の文化

資 140・142・143

(1) 応仁の乱をきっかけに、地方に中央の文化が伝播

- ①大内氏の (山口) ②今川氏の (府中)

(2) 戦国大名は儒学に関心を持つ

- ① (桂庵玄樹) : 菊池氏 (肥後)・島津氏 (薩摩) によって
 招かれる 薩南学派

- ②南村梅軒 : 土佐 海南学派

- ③下野の (足利学校) : (上杉憲実) の再興。

円覚寺 (鎌倉) の僧快元を招く。

→ 儒学・易学

商工業者や民衆も読み・書き・そろばん

(3) (木綿) の栽培の開始

← 戦国大名が兵衣や鉄砲の火縄に用いた。

- Q 木綿のメリットは A (軽くて、暖かい)

A (分国法 寄親寄子制 指出検地)

※ () に二重下線を引いている語句は赤色で板書した重要語句である。

5 年 組 番 氏名

1. 豊臣秀吉が獲得した領地に対して行った、土地・人民の調査を何というか。
2. 豊臣秀吉が大仏建立を名目に、地侍や農民から武器を没収し所持することを禁止した法令は何か。
3. 豊臣秀吉が 1587 年に九州を平定した後、大村純忠が長崎で教会領を寄進していたことを知り、キリシト教を統制するために出した法令は何か。
4. 豊臣秀吉の二度に渡る朝鮮出兵において朝鮮水軍を率いて日本軍を苦しめた武将は誰か。
5. ポルトガル人やスペイン人からもたらされた文化を何というか。
6. 豊臣秀吉に仕えた堺の豪商や閑寂の住び茶の茶風を確立した人物は誰か。
7. 関ヶ原の戦いの後、西国や朝廷の動向を監視するために設けられた役職は何か。
8. 1614・15 年にかけて、豊臣家を攻め滅ぼした出来事を何というか。
9. 將軍の直屬の家来で、謁見(御目見え)を許されている者を何というか。
10. 幕府が將軍の代替わり毎に出したいたるまで規制を加えた取り決めを何というか。
11. 天皇の生活や公家の家業・席次にいたるまで規制を加えた取り決めを何というか。
12. 1609 年、朝鮮と対馬の宗氏との間でむすんだ交易再開の取り決めを何というか。
13. 徳川家康によって西国大名や豪商に与えられた海外渡航免許可証を何というか。
14. 1604 年に特定の商人が生糸を一括購入して、ポルトガル商人らの利益独占を排除した制度は何か。
15. 1612 年に幕領に、翌 1613 年に全国に拡大されたキリシト教の信仰を禁じる法令を何というか。

1	太閤検地	2	刀狩令	3	宣教師追放令	4	季舜臣	5	南蛮文化
6	千利休	7	京都所司代	8	大坂冬の陣・夏の陣	9	旗本	10	武家諸法度
11	禁中並公家諸法度	12	己酉約条	13	朱印状	14	糸割符制	15	禁教令

二 実践報告―天地人の世界を学ぼう―

二〇〇九年度大河ドラマ「天地人」の主人公は直江兼統であった。直江兼統は「義」「愛」を掲げて生涯を全うした上杉家の家老である。

直江兼統が生きた時代は、戦国時代から織豊期を経て、江戸時代初期にあたる。教科書では「第十章 中世から近世へ」に該当する。そこで「第十章 中世から近世へ」の学習の締め括りとして、大河ドラマ「天地人」を取り上げた特別講義「天地人の世界を学ぼう」を行った。

単元構成は次の通りである。

総時間数 七時間

- ① 戦国の動乱……………二時間
- ② 南蛮貿易と東アジア……………一時間
- ③ 豊臣政権の全国統一……………一時間
- ④ 太閤検地と朝鮮侵略……………一時間
- ⑤ 南蛮貿易と桃山文化……………一時間
- ⑥ 天地人の世界を学ぼう……………一時間

それでは、レジュメと資料（資料三）に基づきながら特別講義の内容を解説することにした。⁽⁶⁾

まず「はじめに」で直江兼統が生きた時代は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康が天下統一をめざして戦った時代であることを提示した。その上で主人公である直江兼統とその妻お船というひと組の夫婦の生き方を、「義」と「愛」を切り口として考えることを提示した。

なぜ「義」と「愛」を切り口にしたのかについて少し説明をしておきたい。「義」を取り上げた理由はいわゆる武士道につながるキーワードとして面白そうだと考えたからである。「愛」については、「天地人」放映時に直江兼統が所有した「愛」の前立をもつ兜から戦国時代には珍しい「愛」を重んじた武将という印象が強くなっていたため、果たしてその印象は正しいものであるのかを学問的に検討することが生徒にとって興味深い話題だと考えたからである。

次に「直江兼統の人物像」として、略年表や系図をもとに直江兼統の足跡をたどることからはじめた。足跡をたどる中で、例えば兼統が上杉家の執政となったのは一五八八（天正一六）年二九歳の時であったことを紹介した。年齢を示すことで具体的なイメージを持つことができると考えた。またお船と結婚した一五八一（天正九）年の翌年に本能寺の変によって織田信長が天下統一の半ばで倒れたこと、一五九〇（天正一八）年秀吉の天下統一が確定した小田原攻めに出陣したこと、武家諸法度や禁中並公家諸法度などが制定される一六一五（元和元）年に大阪夏の陣に参陣していること、など教科書にみられる出来事と結びつけながら足跡をたどることを心がけた。兼統の個人史に終わらせるのではなく、全体史の中に位置づけることが大切だと考えたからである。

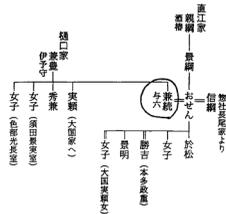
その上で本論に入った。

まず直江兼統の「義」について取り上げた。

直江兼統にとっての「義」を考える前に、「義」という言葉の意味について考えることからはじめた。そこで儒教

- 1599 (慶長 4) 年 兼統、南化玄興から『文鑑』を贈られる。
- 1600 (慶長 5) 年 徳川家康から兼統あてに弾劾状が届く。返書「直江状」が家康を立腹させる (41 歳)。
長谷堂城の戦い＝「北の関ヶ原」
- 1601 (慶長 6) 年 景勝、会津 120 万石から米沢・伊達・信夫 30 万石に減封される。
- 1614 (慶長 19) 年 大坂冬の陣。兼統、米沢から出陣。
- 1615 (元和元) 年 大坂夏の陣。景勝、兼統参陣。
- 1619 (元和 5) 年 12 月、兼統江戸の鱗屋敷で死去 (60 歳)
- 1637 (寛永 14) 年 1 月、お船、江戸の鱗屋敷で死去 (81 歳)

(2) 系図 (文献② p 10 より)



直江家と樋口家の関係 Ⅱは親子関係

(3) 逸話「武田方の謀者を暴く」(文献① p 47 より)

樋口与六、武田方の謀者を暴く
 兼統にまつわる逸話はいくつか残っているが、その利発さを示す、こんなエピソードが残されている。
 あるとき、上杉謙信のもとを武田信玄の使者として和歌に造詣の深い岡田堅桃斎かたてんとうさいという人物が訪れた。「越の長浜」という名所に招待すると、堅桃斎は同行の童子とともに、なにやら縄を投げて遊んでいたという。
 その後、信玄から「越の長浜とはどれくらいの長さがあるのか教えてほしい」という要請があり、謙信が家臣に実際に測らせようとすると、「すでに信玄の使者が測っていった」と言う若者がいるという。詳しく聞いてみ

ると、堅桃斎は遊びと見せかけてさまざまな場所の長さや高さを測っていたというのだ。この若者こそが樋口与六、後の直江兼統だった。
 後年の創作だとはいえ、兼統の利発さを示している逸話といえよう。

1. 直江兼統の「義」

(1) 「義」とは何か

「義」＝儒教の徳目(「仁・義・礼・智・信」)の一つ
 人として守るべき正しい道。たとえ不利益をこうむろうとも、背筋を伸ばして真っ直ぐに道を貫くこと。
 のちの『武士道』(岩波文庫、1938年)へ

資料三

2009年12月吉日

第10章 「中世から近世へ」補足特別講義

天地人（てんちじん）の世界を学ぼう

～直江兼統とお船 「義」「愛」「文」～

丸 山 仁

目次

- はじめに
- 0, 直江兼統の人物像
- 1, 直江兼統の「義」
- 2, 直江兼統の「愛」
- 3, 直江兼統の「文」
- 4, お船
- むすびにかえて

はじめに

NHK 大河ドラマ「天地人」で主人公直江兼統を演じたのは、人気若手俳優の妻夫木聡さんです。時代はいま学習している戦国時代。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康をはじめとする戦国大名たちが天下統一をめざして、知謀知略をめぐる戦った時代。そんな時代において「義」「愛」を掲げて生涯を全うしたのが上杉家家老直江兼統でした。そんな兼統を支えたのが妻であるお船でした。今日は直江兼統やお船の「義」「愛」の生き方を皆さんと一緒に学ぶなかで、現代に生きる私たちの生き方について考えていきましょう。

0, 直江兼統の人物像

(1) 略年表

- 1560 (永禄3) 年 樋口惣右衛門兼豊の長男として誕生。幼名は与六
※ 桶狭間の戦いの年
※ 父は身分の低い御旗用人であったが、「算勘の才」を認められ出世＝「家柄」より「器量」への価値転換
- 1564 (永禄7) 年 上杉景勝の近習となる。兼統5歳
- 1578 (天正6) 年 上杉謙信死去(49歳)
御館の乱。兼統、上杉景勝とともに戦う。
- 1581 (天正9) 年 兼統、直江家の婿養子となり家督を継ぐ。お船と結婚(22歳)。
- 1588 (天正16) 年 景勝・兼統主従が上洛。大坂城で秀吉に謁見(29歳)。
兼統、千利休から茶に招かれる。
妙心寺の南化玄興から『古文真宝抄』を借りて書写させる。
- 1589 (天正17) 年 兼統の采配で佐渡平定。
- 1590 (天正18) 年 景勝・兼統、秀吉の小田原攻めに出陣。
- 1595 (文禄4) 年 兼統、南化玄興から『漢書』十二巻を贈られる(36歳)。
- 1598 (慶長3) 年 景勝、会津120万石へ。兼統は米沢30万石。

日本史Bにおける大河ドラマを取り入れた単元構成とその展開

九九

[物事の正邪などを判別する心のはたらき]
教養 [教えること]

(2) 兼統の蔵書

- ①『古文真宝後集』(こぶんしんぼうこうしゅう)の注釈本
= 中国の戦国時代から唐宋に至るまでの詩文の名作を集めた書物。
→ 五山文学に傾倒
- ②『漢書』『後漢書』『史記』 ※ 現存国宝に指定
- ③『文選』を発行 ※ わが国初の銅活字を用いた活字本
→ 漢詩文を読み書きする際に必要な事項を整理した本

Q なにをこれらの書物から学ぼうとしたのか。

- A 王道の規範 「武力だけでは世の中は治まらない」
= 「仁」 (= 慈悲の心)

(3) 禅林文庫の開設：自らの蔵書などを収蔵した学問所

4. お船

- (1) 上杉景勝の息子定勝の「乳人」(めのと)
→ 事実上の「母」
ex 定勝はお船没後に高野山清浄心院に供養を依頼
- (2) 「国政」をあずかっていた。
「此 則、直江大和守政綱カ娘ニテ、兼統卒シテ後、国政ヲ与リ聞ク、
故ニ群臣之崇敬他ニ異也」(『定勝公御年譜』 ※ 米沢藩の正史)
- (3) 石高 3000 石 資料④ ex 2000 石以上の家臣はすべて侍衆・御年寄衆

むすびにかえて

直江兼統の「義」「愛」「文」についてみてきた。下剋上の世の中で兼統が大切にしてきたこの3つのことは、その後の時代の中でもその折々において振り返られるべきものであり、今に生きる私たちにも通じるものではないだろうか。今日の講義を通して、自分自身がこれから人生を歩んでいく中で大切にしたいことは何なのかを今一度問い直してみたいだろうか。

〈主な参考文献〉

- ① 小和田哲男監修『NHKドラマ歴史ハンドブック 天地人』(NHK出版、2009年)
- ② 矢田俊文編『直江兼統』(高志書院、2009年)
- ③ 新渡戸稲造著(矢内原忠雄訳)『武士道』(岩波文庫、1938年)

※ 新渡戸稲造が1899年に著述したもの。資料①
『武士道』の「義」＝「武士の掟中最も厳格なる教訓である」
林子平における「決断力」
ex 赤穂浪士

(2) 兼続の「義」とは

- ① 上杉謙信から学ぶ＝「義によって不義を討つ」
a 仏法……………戦の神「毘沙門天」
※ 母虎御前は熱心な仏教信者
b 和漢の学問……………春日山林泉寺の天室光育
c 私利私欲のためではなく、室町幕府のため・関東管領としての「義戦」

② 「直江状」（慶長5年〈1600〉4月14日）資料②

豊田家に対する忠誠
＝「太閤様の掟にそむき、幼少の秀頼君とことを構えたのでは、たとえ天下の主になったとしても悪名はまぬがれず、未代までの恥となります」
※ 秀頼から天下を取り上げようとする家康に対する批判

③ 上杉家の「義」の証とは

石高が120万石から30万石に減っても、家臣の8割が上杉家に残った。

2. 直江兼続の「愛」

(1) 「愛」の前立（＝兜の正面に立つ印） 資料③

- 「愛」＝①戦勝の神として戦国武将の信仰のあつかった「愛宕権現」
②同じく戦勝の神「愛染明王」
③「愛民」

(2) 「仁愛」

「仁」＝「愛・寛容、愛情、同情、憐憫は古来最高の徳として、すなわち人の靈魂の属性中最も高きものとして認められた」
「王者の徳」
孔子や孟子いわく「人を治むる者の最高の必要条件は仁に存する」

3. 直江兼続の「文」

(1) 「文」とは何か

「文」＝学問 [勉強すること。武芸などに対して、学芸を修めること]
知識 [ある事項について知っていること。またその内容]

の徳目の一つとしての「義」とは人として守るべき正しい道であることを指摘した。その上で新渡戸稲造『武士道』を紹介した。『武士道』における「義」とは、武士の掟中最も厳格なる教訓であるという。⁽⁷⁾『武士道』とりわけ新渡戸稲造の「義」について紹介するにあたって、特に新渡戸稲造の記述の中から仙台藩ともゆかりの深い林子平による「義」、また赤穂浪士の吉良義央（上野介）討ち入りについて取り上げた。地域と関わりのある人物や歴史上有名な出来事を取り上げることで興味・関心を高めることができると考えたからである。さらに『武士道』はそもそも英語で書かれたものであることからオリジナルの英語版でも紹介した。⁽⁸⁾なるべく原点にあたるのが大切だと考えたからである。

その上で本題である兼統の「義」について取り上げた。兼統の「義」として①上杉謙信の関東管領としての「義」（自分の領土を拡大することを目的とする「私」のための戦はせず、室町幕府の秩序を守るための戦を行ったというもの）、②「直江状」にみえる豊臣家に対する忠誠という「義」（秀吉の遺言に背き、豊臣家を滅ぼそうとする戦を否定する精神）、③兼統の「義」の精神が浸透した姿としての米沢への滅封における「義」（石高が四分の一に減らされてもできるだけ多くの家臣を養おうとする精神）の三点を指摘した。

次に直江兼統の「愛」について取り上げた。

大河ドラマ放映時、一番話題になったと言っても過言ではない前立（＝兜の正面に立つ印）の「愛」について、この「愛」は、現代的な意味での愛ではなく、戦勝の神として戦国武将の信仰のあつかった「愛宕権現」、あるいは同じく戦勝の神である「愛染明王」と考えるのが現時点での一般的な解釈であることを指摘した。その上で「愛民」や「仁愛」として考えられるとすればどのような意味となるのかを考えた。ある意味で「夢」（歴史的ロマンと言いつ

資料②



「直江状」は、上杉家の誇りと意地を示した格調高い反論書だ。

「直江」は、上杉家の誇りと意地を示した格調高い反論書だ。...

かろうと信じてます。...

資料③

「直江」は、上杉家の誇りと意地を示した格調高い反論書だ。...

かろうと信じてます。...



直江兼続
慶長4年(1623)の戦いで、上杉家の旗本として活躍した。...



資料④

表2 豊永八年分限額石高表(2,000石以上)

順位	石高(石)	人名	籍名	籍考
1	4,353	坂田上郎	侍衆	一宮衆旗頭
2	3,333	本庄世頼守	侍衆	二宮衆旗頭
2	3,333	色部辰門	侍衆	三宮衆旗頭
4	3,330	清野辰房守	侍衆	御年寄衆
5	3,000	平塚伊豆	侍衆	
	3,000	藤原	侍衆	
7	2,333	島津重隆	侍衆	四宮衆旗頭
8	2,273	宇田直前守	侍衆	
9	2,133	町田北成守	侍衆	
10	2,000	原金十郎守	侍衆	
10	2,000	松尾辰門	侍衆	
10	2,000	池田辰房	御年寄衆	番外

えても良い)を否定するようなことになってしまったかもしれないが、歴史的な「史実」を踏まえることはやはり必要不可欠なことである。

次に直江兼統の「文」について取り上げた。教材研究として兼統のことを調べる中で「文」の側面が特徴的であることを知り、「義」「愛」とならば三本柱として取り上げたものである。『古文真宝後集』の注釈本、現在国宝に指定されている『漢書』『後漢書』『史記』、わが国初の銅活字を用いた活字本である『文選』といった蔵書などから、兼統は漢詩文に親しみ、五山文学に傾倒していたと考えられることを指摘した。これらの書物の性格・内容から、上杉家家老としてどのように人々を導くかを模索する中で兼統は王道の規範としての「仁」(＝慈悲の心)の精神に至ったのではないかと考えた。

最後に兼統の妻お船について取り上げた。お船は夫兼統の主君上杉景勝の息子である定勝の「乳人」としての役割を担ったが、事実上の「母」として上杉家で高い地位にあったことを指摘した。宮城学院高等学校は女子校であることもあって、歴史における女性の果たした役割を紹介することは大切だと考えている。男女平等の社会が叫ばれて久しい。しかし教科書に登場してくる女性の存在は男性に比較してわずかであるといっても過言ではない。

むすびにかえて

以上、二〇〇九年度の大河ドラマ「天地人」を取り上げた実践を紹介してきた。戦国期から織豊期にかけての政治・経済・社会・文化を学ぶ中で、兼統という一人の人物に焦点をあてて具体的に考える中で、教科書に登場した他の戦国大名の領国でも兼統のような人物が主君を支えていたのではないか、というような意識になるならば、より深みの

ある歴史認識の形成へとつながるのではないだろうか。

大河ドラマは、文字や写真ではなく映像として認識することができると具体的なイメージを描きやすい。しかし当たり前な話であるが、大河ドラマは文字通りドラマであってそこで映し出される場面やセリフは必ずしも歴史的事実である「史実」ではない。したがって歴史学という学問としての立場から考えると無批判にそれを歴史的な事実として取り上げることは決して承認できないことである。日本史の授業として取り上げる以上、「史実」との比較検証は不可欠な作業である。⁹⁾

〈註〉

- (1) 拙稿「日本史に対する興味・関心を高めるにはどうするか―大河ドラマを切り口として―」(『宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 研究年報』第四三号、二〇一〇年)
- (2) 高校二年生でクリエイティブコース〈文系〉、高校三年生でクリエイティブコース〈文Ⅱ〉を選択した生徒の場合を紹介する。
- (3) その他に副教材として問題集『新日本史研究ノート 標準編』(啓隆社)を使用した。
- (4) なお参考として実授業時間をあげておく。二〇〇九年度高校二年生の実授業時間は一一〇時間、二〇一〇年度十一月までの高校三年生の実授業時間は九三時間であった。
- (5) コラムの記事は五味文彦・野呂肖生編著『ちよっとまじめな日本史Q&A 上 原始古代・中世』(山川出版社、二〇〇六年)などを参考にした。
- (6) 主な参考文献は次の通りである。小和田哲男監修『NHKドラマ歴史ハンドブック 天地人』(NHK出版、二〇〇九年)、矢田俊文編『直江兼統』(高志書院、二〇〇九年)

(7) 新渡戸稲造著〈矢内原忠雄訳〉『武士道』(岩波文庫、一九三八年)

(8) INAZO NITTOBE 『BUSHIDO The Soul of Japan』(TUTTLE PUBLISHING, 1969)

(9) 「史実」のなかにある興味深いエピソードを発掘し、それを単なる個人ないし個別のエピソードとしてではなく、歴史の大きな流れのなかに位置づけることができた時に「本物」の興味関心につながっていくのではないだろうか。宮城学院高等学校では伝統的に校外研修旅行として京都・奈良を訪れている。鹿苑寺金閣や興福寺阿修羅像など「本物」をみる生徒のまなざしは熱いものがある。その熱いまなざしを教室の中でも引き出すような授業を目指したい。